環境影響評価審査書に対する事業者の主な対応

００４	清川カントリークラブ総合開発事業	
項　　目	審　査　書　の　指　摘　事　項	事　業　者　の　対　応
総括事項	計画地は、県立丹沢大山自然公園区域内に位置しており、その周辺とともに、自然性の高い植生を基盤として各種の動物が生息し、地域の多様な生態系を形成している。 このような自然環境は、丹沢山塊の縁辺部では比較的多くみられるものであるが、この縁辺部の環境が、自然の宝庫といわれ、県民の貴重な財産となっている丹沢の自然、景観を側面から支えてきたものといえる。 したがって、開発を行う場合には、現在の自然の状態を極力残すことを基本方向として、（１）地形の改変量は最小限にとどめる、（２）生態系が多様で自然性の優れているところは極力保存する、（３）稜線及びそれに接続する斜面は極力現状のまま保存するという配慮が必要である。 環境影響予測評価書案による具体的な事業計画、及び環境に対する配慮をみると、このような立地上の位置づけに対する認識は必ずしも十分とは認められず、事業実施に際し、特に斜面崩壊、動物、植物、景観などとの関係で、環境保全上の再検討が必要と認められる。	審査書で指摘された開発に当たっての必要な配慮に基づき、次のとおり土地利用計画を見直した。 ○地形の改変量は最小限にとどめる。 切土面やゴルフコースの一部の施工高を低くすることにより、切土量を12%、切土法面積を39%減少させる。盛土についても同様に、盛土量を11%、盛土法面積を12%減少させる。ゴルフコースの面積を5%減少させる。2号調整池の面積を36%減少させる。 ○生態系が多様で自然性の優れているところは極力保持する。 クヌギーコナラ群集の比較的一体となって生息している樹林の部分は、ゴルフコースの位置及び規模、調整池の規模を変更して保存に努める。計画地内に残置する森林を、造成地を縮小することにより増加させる。計画地内の主要な樹林等については、できる限り保存するとともに、造成する場合には適宜移植を行う。 ○稜線及びそれに接続する斜面は極力現状のまま保存する。 稜線に接続する切土法面積を39%減少させる。稜線及びそれに接続する斜面の切土面を、極力稜線から離す。
水質汚濁	クラブハウス、管理棟等から排出される排水については、計画の処理施設では十分な処理効果が期待できず、また、排出先の小鮎川等の水質が既に環境基準を超えている状況を考慮すると、現況を改善する方向でより高度な処理をすることが望まれるので、土壌等を活用する処理方法も併せて再検討すること。 農薬の散布については、適正な農薬の選定及び散布方法に留意すること。	クラブハウス及び管理棟からの排水は、ＢＯＤ15　以下に処理した後、土壌浄化法（毛管浸潤トレンチ方式）により処理し、公共用水域へは流出させない。また、売店からの排水は、浄化槽で90ｍｇ／ｌまで処理し、2号及び4号調整池に導水し、調整池水と混合した後流出させる。 農薬等の使用に当たっては、次の点に留意する。 ○薬剤は基本的に毒性の弱い一般的なものを選定し、毒性が高い殺菌剤については、病徴が設められた場合に限り局所的に散布する。 ○強い降雨のある時期には散布は行わない。 ○風速が約3m／ｓｅｃ以上になったときは、散布を中止する。
地象	計画地は起伏が大きく、造成に伴い大規模な切土及び盛土が予定されているので、斜面崩壊に対する安全の確保には、細心の注意を払う必要がある。 したがって、地質調査の結果をもとに、法高を極力低くする等の対策を検討するとともに、工事の実施に当たっては適切な土性値が確保できるよう土工管理を十分に行うこと。 また、盛土部の転圧、水抜きによる地盤の早期安定化などの対策を実施すること。	５番ホール付近の盛土高を５ｍ低くするとともに、長大切土部における切土を減少させる。 土工管理については、当初の計画のほか更に、盛土材料、締固め状況、浸透水と排水、盛土の強度を盛土施工中に常に観察する。法面に崩壊発生の徴候がみられた場合には、防災に留意して応急処置を講じるとともに変状観測などの調査を行い対策を検討する。 排水水抜きの対策については、浸透水に対してはフィルター材を盛土用にサンドウィッチ状に設置する。湧水がみられるところには、有孔パイプを使用する。法面締固めと同時に防水シートで覆うことを新たに講じる。